

20世紀資本主義の変化の画期

- たたかいによる20世紀資本主義の変化の画期
- ①1917年ロシア革命—特に北欧における社会民主主義の思想と改革、1919年ワイマール憲法に生存権、1919年ILOの結成、資本主義における雇用・景気調整
- ②第二次大戦後の変化—反ファッショの闘いと大西洋憲章、戦後の脱植民地化(植民地の独立、一大勢力に、旧宗主国の変化、両者の関係の変化)、国民権と民主主義の発展(普通選挙、人種・性・貧富による差別の廃止へ)、米ソ「冷戦」と両国への従属による制約
- ③ソ連崩壊以後

60

先ほどもふれましたが、ソ連崩壊後「新自由主義」ばかりが広がったわけではありません。それは見方が狭いです。ソ連崩壊の後、ヨーロッパは九三年にEUが発足して「社会的市場経済」と呼ぶ資本主義づくりをおこなっています。それを目指す国民の運動があるわけです。その同じ時期に日本はアメリカ型の「構造改革」の道に入り、「失われた一〇年」を生

みだすことになったわけですから。明らかに、日本はお手本をとりまちがえました。アメリカ一辺倒の限界を、いまこそ抜け出さなくてはなりません。

その一方で、アメリカ帝国主義は自信喪失です。経済的地位も低下し、オバマ路線への転換の中で、なんとか巻き返しをはかるうとしている。

もう一方で、BRICsと呼ばれるブラジル、ロシア、インド、中国の四カ国、さらにその後の「ネクスト11」など、二〇世紀半ばまでは植民地だったという多くの国々をふくむ新興国が急速に経済力・政治力を高めています。これらの国は、さらに民主主義と人権、各人の自由保障の方向での一層の変化を期待しなく思い、その変化は避けられないものになるとも思い

現代世界の変化の方向

- 20世紀末から21世紀初頭にかけて
- ①「社会的市場経済」をめざすEU型資本主義の発展(93年EU発足)、ドル支配の脱却をめざす単一通貨ユーロ(99年導入)
- ②アメリカ帝国主義の世界的な威信喪失、経済的地位の低下、スマートパワー路線の模索
- ③BRICs、ネクスト11など新興諸国の経済的成長と政治的発言力の拡大、連帯の広がり
- ④「市場を通じた社会主義への道」を模索する中国、ベトナムの成長と世界的ネットワーク、「平和共存」
- ⑤「新しい社会主義」を模索する国の登場、ベネズエラ、ポリビア、エクアドル
- ⑥グローバリゼーションのもとでの相互交流の深まり

61

ます。それから先の二〇五〇年の世界を見たときに、GDPで第一位になるのは「市場を通じた社会主義」を模索している中国です。ベトナムもそういう国です。一昔前だと、こういう国をアメリカ等は経済的に「封じ込め」ようとした。いまはそれをする事ができない。反対に交流を深めなければ、アメリカ企業ももうからない。同じようにキューバへの封じ込め

政策もアメリカはただちに一掃するべきですが、もはや資本主義の経済大国も社会主義をめざす人々を排除することはできない時代になっている。

さらに南米には、ソ連型でない新しい社会主義を模索する国が、ベネズエラ、ポリビア、エクアドルのように誕生している。このように世界は躍動的な変化をとげています。

その中で、日本にはなぜ大きな前進がなかなか生まれないのか。私はこの問題は日本資本主義の歴史のなかでとらえるべきだと思います。社会には歴史があり、その歴史の中で個人もつくられる。では民主主義や人権、平和をめぐる日本の歴史はどのようなものであるのか。その検討が欠かせないと思います。日本社会には「自己責任」論が、簡単に入ってしまう。これを

日本資本主義の発展と人間の成長

- ①「開国」の圧力のもとでの資本主義化(富国強兵の軍事的資本主義)、ブルジョア民主主義を求める力の弱さ(大正デモクラシーへの弾圧)
- ②「脱植民地化」に向かう世界の中での帝国主義的膨張政策、敗戦による植民地喪失と侵略への無反省(戦前・戦後の政治と国民意識の連続面)
- ③アメリカによる占領支配のもとでの憲法体系と安保体系の対立、戦後民主主義(主権者・人権意識)の脆弱性
- ④帝国主義アメリカに追従するもとでの資本の急成長、独自の外交戦略がもてない支配層、「財界・アメリカいいなり政治」の形成

62

流してかちとられていく。そうやって資本主義が育っていく。それに対して日本は黒船にかこまれた中での「富国強兵」型の上からの資本主義づくりです。その権力は天皇制で、民主主義を求めた運動は徹底的に弾圧されました。ですから、日本では民主主義ということ語って弾圧されない社会になって、まだ六五年しかたっていないのです。

すぐれた憲法を手に入れることはできたが、それを国民全体の思想とすることはいまだできていないのが現実です。だから「自己責任」論への国民的な抵抗力が非常に弱い。ここを直視したたたい方が必要です。「みんなが安心して暮らすにはこういう政策が必要だ」という前に、「なぜみんなが安心して暮らす

払拭するたたいか」といっても大きなエネルギーが必要とされる。なぜ、そうなるのか。それは、国民の意識やからだに、人権や民主主義の思想がしっかりと入り込んでいないからです。それはたとえばフランスと比較すれば、資本主義のつくられ方が相当違います。歴史的制約があったとはいえ、フランスでは「自由・平等・博愛」のスローガンののもとに、王政打倒、議会と選挙権の獲得が、血を

国民の成長が歴史的課題に

- ①人権・民主主義を定着させせていない(「財界いいなり」政治の温床、「自己責任」論にひきずられる)
- ②侵略と植民地支配への総括が曖昧(靖国史観と決別できない、「中韓蔑視」にひきずられる)
- ③独自の世界戦略がもてない国民(「アメリカいいなり」政治の土壌、軍事力・抑止力論にも)
- 人権・民主主義(「構造改革」からの脱却)、脱植民地支配(東アジアとの友好と経済協力)、経済・平和・環境での世界への積極的貢献(真の独立)
- 今日的課題を達成する中で国民の政治的成長が避けることのできない歴史的課題に

63

「手」の問題である以上に「思想」の問題です。それらの未熟さを、日本社会つまり日本人はいま乗り越えていくことを求められている。そこをうまく乗り越えることをリードしていくのが私たち、みなさん方の運動です。そういう大きな構えが必要です。

日本社会は、それらの課題を前進的に乗り越えることができれば、新たな発展と充実の段階にすすむことができるし、そこに

をつくらねばならないのか」という思想のレベルでの議論が必要なのです。「食えない人が死ぬのは自己責任だ」という思想に対して、「どんな理由であれ食えない人を見殺しにする社会であってはならない」「そこに手を差し伸べる政治をつくる必要だ」という思想をぶつける必要がある。

他にも、侵略と植民地支配への反省の曖昧さ、また戦後の対米従属のために自分のあたまで外交政策をつくることのできない自立度の低さ。こういった重大問題を日本社会と国民は、日本資本主義の発展の歴史の到達点として抱え込んでいるわけです。それが、中国敵視論にのせられやすい、韓国敵視論にのせられやすい、在日米軍基地を仕方がないと受け入れる、そういう弱さにつながっています。いずれも根本の思想の問題です。

延々と時間がかかれば、社会の衰弱が進みます。一皮グイとむけていくことが必要です。

⑪ 「賢い国民」に育つ取り組みを

⑪ 「賢い国民」に育つ取り組みを

- 民主党政権は、① 普天間基地、② 核密約、③ 後期高齢者、④ 労働者派遣法、⑤ 政治とカネ等で期待を裏切り、いままた、⑥ 比例定数削減、⑦ 消費税増税など新たな悪だくみを
- 財界・アメリカいいのりの菅政権と国民の願いの矛盾はただちに露呈する、① 消費税増税なき日本の再建方針の提示、② 11月沖縄県知事選で政治の転換にはずみを
- 社会改革の土台は「国民が賢くなること」、それを促進するのがよりよい社会づくりの運動の基本

64

けです。善意と根性だけでは社会はかえられません。時代をリードする知性が不可欠です。

学びの基本は独習です。自分でボールペンを片手にもって、本を読み、線をひき、書き込みをしていくことです。他人の話など誰だつて三日で忘れます。今日の私の話だつて、今夜ビールの栓をプシュッと抜いたあたりから、どんどん抜けていくのです。人間はそういうようになっていきますから。

そうであれば、忘れるよりたくさんからだに入れていくしか

さて、おしまいです。そういう国民全体の思想的成熟を促す運動に取り組むために一体何が必要か。それは運動の担い手自身が、そういう思想をしっかりと身につけ、それがいつでもからだから溢れるような状態になることです。つまり徹底的な学びです。学ばない集団に社会をかえることはできません。そのような組織と個人は、時代遅れになるだけ

新しい変化を生み出すための学習を

- 模索する国民に「政治・社会のあり方」を語りかける外向きの取り組み、独自の要求運動と日本社会づくりをセットにした打ち出しの探究
- 運動家1人1人が「賢くなる」ことが大戦略、毎日の独習が当たり前である集団に
- ① 個々の局面の変化に乗り遅れない学習、② 人間社会の発展についてのそもそも論(史的唯物論)の学習の両方が必要
- 学びの基本は本とペンを持つての独習、自分だけのカリキュラムをしっかりとつくる
- 「わかる人間になりたい」という熱意と責任感を原動力に、時間を限って読む、学びの「空間」に閉じこもる、手帳の「空き時間」こそ最重要

65

長に自分で責任を追う。そのために自分の成長を日学習する。そういうふうにならなければならないと思います。

先輩のみなさんにこういう話しをすると、遠い目をして「そういえば、わしも若い頃は学んだ」と言われる方がありますが、二〇世紀の科学ではもうだめです。時代もかわっています、それを分析する社会科学のレベルも変わっています。いつでも最新の学問についていく努力をしなければだめなのです。学習は自己を鍛えるたためです。そのたまたかから逃げてはだめなのです。

学びの柱はいろいろありますが、いま大事なことの二つは、

ない。それは自分で学ぶ習慣を身につけることによってしか実現しないのです。今日の私の話しは、そういうふうになさる生活習慣をかえるきっかけになれば、みなさんにとって意義があります。しかし「ああ、おもしろい話し聞いたなあ」というだけであれば、話しを聞いて得られたエネルギーなど三日で消えていくわけです。今日この時間を無駄にしないために、自分の成長を日学習する。そういうふうにならなければならないと思います。

変化を根本からつかまえるために



66

資本主義を根本からとらえるという大きい構えがいるということです。その点では、やはりマルクスです。もう一つ大切なのは、世界の変化をしっかりとらえるということです。皆さん、大いに学んで、大志をもって改革の取り組みをつげましょう。(大きな拍手)

(記念講演の内容をテープから起こした文章に石川康宏先生に修正・加筆していただき、まとめました。)

(文責・私鉄「連帯する会」事務局吉田)

